

学習室



「メルヘン」は「童話」なのか？

―比較文学文化とグリムの森―

大野 寿子

* * *

「グリム」に関する授業前や授業初回には、受講生を対象にアンケートを実施するのが常である。内容はいたってシンプルだ。「グリム」と聞いて思いつくもの、「メルヘン」と聞いて思いつくもの、そして「森」と聞いて思いつくものを、何でもいいからお書きなさい。イメージでも、知っていることでも、疑問でも何でもいい。それが、鮮明であってもおぼろげであってもかまわない。書くことが難しいというのなら描いてみるでもいい。さあ、己に問いかけてみよう。これが、筆者の授業の出発点である。しかしながら、通信教育部の特に「レポート学習」形式の授業では、この授業前アンケートを実施する機会がない。そこで異例ではあるが、いまここで、この『学習室』の読者諸氏に告ぐ。上述の三つのことは、「グリム」、「メルヘン」そして「森」から連想されるものを、まず自由にイメージしていただきたい。さあ、どのようなものか思い浮かぶだろうか。

まず、「グリム」と聞いて思い浮かぶもの。これまでのアンケート結果中一番多い回答が、やはり「グリム童話」であった。さらに「グリム童話」であるという前提で、「幼い頃に読んだ絵本のイメージ」、「ハッピーエンド」、「薄暗い感じ」という漠然としたイメージを挙げた者もいれば、「ヘンゼルとグレーテル」、「白雪姫」、「シンデレラ」など、具体的な話の名前を挙げた者もいた。あるいは、このように列挙した後で、「どれが『グリム童話』なのか、どれが『アンデルセン童話』なのかわからなくなりました」と、困惑が素直に綴られたものもあった。実際、「アンデルセン童話」といわれるものは、ハンス・クリスティアン・アンデルセン (Hans

Christian Andersen, 1805-75) とどうデンマークの童話作家(詩人)の創作であり、「グリム童話」と呼ばれるものは、グリム兄弟が収集刊行した民間伝承であることを、ここに補足しておこう。

「グリム」といえば「グリム兄弟」という回答が、次に多い回答であった。「世界ではじめて昔話を集め研究した人々のようですね」、「作家ですか？ 学者ですか？」といった問いかけも見受けられた。これは、ある高校で同様のアンケートを実施したときのことであるが、「飛行機に乗った兄弟」という回答が男子生徒から数件挙がり、大変ほほえましく思ったことがある(ライト兄弟か)。さて、答えて曰く、グリム兄弟とは、兄ヤーコプ・グリム(Jacob Grimm, 1785-1863)と弟ヴィルヘルム・グリム(Wilhelm Grimm, 1786-1859)の二人の兄弟のことを指す。彼らは、現在の国名でいえばドイツの、優秀な言語学者、法学者、文学者、民俗学者、歴史学者にして大学教授であった。日本で「グリム童話」と称されるものは、彼らの手により一八二二年に初版第一巻が収集刊行された、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(Kinder- und Hausmärchen, 略KHM)のことであり、この最終決定版の第七版(一八五七年)には、二〇一話のメルヒェンが収録されている(ただし、通し番号は二〇〇番まで)。彼らは、さながら考古学者が土器の破片を発掘し修復するかのごとく、ゲルマンの古代の残滓である伝承文学(神話、伝説、メルヒェンなど)の収集と保存、すなわち『グリム童話』の刊行を行った。ということは、『グリム童話』

には、グリム兄弟が、ドイツ的でいにしえの香りがすると感じたものが集められていることになる。換言すれば、そこには、彼らの「いにしえ」の理念が凝縮されていることになる。

ところで、「グリム童話」を連想した者の中で、『本当は恐ろしいグリム童話』という本を昔読んで、そのインパクトがかなり強烈でした」という内容の回答を寄せた者もまた大変多かった。それに関連してか、「グリム童話」のイメージとして、「グロテスク」、「恐ろしい残酷なイメージ」を抱いている者が多いようである。ところで、桐生操氏による上述著作中の諸話自体は、考察の延長線上に位置する、とても魅力的な創作なのであり、本当のグリム童話ではない。しかしながら、残酷な場面が「グリム童話」にはたしかに存在する。たとえば、継母が実の娘二人に、小さな靴に合わせてかかとやつまさきを切り取るように命じるKHM 21「灰かぶり(シンデレラ)」しかり、継母が継子である男の子を殺し、その男の子を煮て作ったスープを父親が飲んでしまうKHM 47「ネズミの木の話」しかり。また、継母(初版では実母)が子どもを殺そうとするKHM 15「ヘンゼルとグレーテル」やKHM 53「白雪姫」などなど。たまたま「継母」の残酷性が浮き彫りとなったが、実母から継母に書き換えられた例も存在することから、継母が本当に残酷なのかの考察には慎重であらねばならない。ここで重要なのは、残酷な描写が存在しはするものの、それには、たとえば流血といった鮮明なヴィジョンが伴っていないことである。ここには、お話の世

界という独自の世界が確立されている。スイスの伝承文芸研究者マックス・リュートイ (Max Lüthi, 1909-91) の言を借りれば、お話の世界は、実世界とはかけ離れて「昇華」(あるいは「純化」)されているため、そんなに生々しくはないという。殺人そのものが未遂に終わっている話も多い。また、子どもを殺そうとする話は確かに残酷ではあるが、洋の東西を問わず特に貧しい階級においては、「口減らし」という名の子殺しが実際に行われていたという、いわゆる負の歴史の存在を視野に入れた、伝承文芸の社会学的考察も必要であろう。このように、グリム童話における「残酷性」は、まずは時代のコンテキストにそって考えてみなければ、解釈を見誤る危険性がある。また、我々の考える「子ども」観と、十九世紀の「子ども」の概念が違うということも、見過ごしてはならないのである。

* * *

次に「メルヘン」という語から連想されるイメージである。「ふわふわした、乙女チックでお花畑のようなイメージ」、「ピンクでフルリっぱいのかわいいお洋服のイメージ」、「ファンタジックで甘い感じ」、「芸能人でいえば小倉優子」などという回答が極めて多く、「グリム」から連想された、ある意味ネガティブなイメージとは正反対の、明るくポジティブな性格を示している。さらに、「お姫様」、「妖精」、「不思議な世界」、「メリーゴーランド」、「辛いことなどい

つさない世界」、「夢のような世界」、「誰もが優しい世界」、「悪がない世界」、「パステルカラー」、「ほのぼの」といった語が多く見受けられた。これが、現在日本で定着している「メルヘン」のイメージなのである。

ところで「メルヘン」という語は、ドイツ語の Märchen からきており、「メルヒェン」という表記の方が、ドイツ語の発音に近い。もともとは「短いお話」という意味であり、「うわさ話」、「笑い話」をも指すことができる。「童話」、「おとぎ話」、「民話」、「昔話」なども示すので、和訳にこまる語なのである。とはいえここでもう、「Märchen」童話」ではなく、「Märchen」童話」、すなわち、「童話」は Märchen の一部であることがお分かりであろう。カタカナ表記の「メルヘン」もまた、よく使用される Märchen の訳語である。しかしながら原語では、アンケート結果にみられるような乙女チックなイメージが付随しているわけでもなく、また、子ども向けの「童話」のみを意味するわけでもない。つまり、常に「メルヘン」童話」ともいえないのである。したがって、筆者のグリムの授業(比較文学文化演習Ⅰ、比較文学文化史)で Märchen を、ドイツ語の発音に一番近い表記である「メルヒェン」あるいは「お話」と呼び、中立性を保とうとするのは、このような日本独自の乙女チックなイメージに惑わされないようにするためなのである。

* * *

最後に「森」について連想されるイメージである。「暗い」、「鬱蒼とした」、「深い」という形容詞を挙げる回答が大変多かった。さらに、「人間があまり奥深くまで踏み込んではいけない場所」、「神秘的な存在」、「何かが起こりそうな場所」という、「森」のミステリアスな側面に言及する回答も目立った。「妖精」、「魔女」そして「トトロ」など具体的な表象を挙げる例も少なくはなかった。「明るい側面と暗い側面の両方をもっているように思う」という、鋭い指摘もあった。また、「森を身近に感じる」と答えた受講生は、その多くの場合において、自分の家の近くに森（山）があるという理由を挙げていた。自分の身近に森が存在していれば「森」のイメージが具体的にとなり、森が身近に存在していなければ、むしろ理念的なイメージとなるように思われる。

ところで、『子どもと家庭のためのメルヒエン集』の最終決定版第七版（一八五七年）の二〇一話の「メルヒエン」の中で、「森」Waldが登場する話は九六話であり、全体の半数近くを占める。また、「メルヒエン」というジャンル以外に、実は、「子どものための聖人伝」というジャンルでも一〇話集められているので、それらも含めると全二一話となり、その中で、森が登場する話は一〇一話である。いずれにせよ、かなりの比率である。

各メルヒエンにおいて森は、あるときには、貧しい木こりや狩人に木材や燃料を供給し、働き者の女の子や空腹の子どもたちに、食料や寝所を提供する。メルヒエンの森が、我々の現実生活と同じ

ようなかたちで登場するときは、人間と森との物質的な関わりが表立つ。その一方で森は、魔女、小人、水の精といった不思議な生き物、人の言葉を話す不思議な動物の住処でもある。さらに森は登場人物たちを、天上世界や地下世界に代表される非現実的世界、この世ならざる世界、すなわち「異界」へと誘う。奥へと進めば進むほど異質となっていくメルヒエンの森は、日常世界と異界との境界であるとともに、すでに異界の一部といえる。ところでこの「異界」という概念は、宗教あるいは信仰において、この世とは別の世界である「あの世」あるいは「彼岸」、すなわち、死者の住む「あちら側の世界」とも重なるものである。今のドイツの地がキリスト教に改宗する以前、古代ゲルマン諸民族の間で森は聖域と見なされ、神々の住まう処として崇められていた。自然の中に神性を見る自然信仰（樹木信仰）、森と人間との精神的な絆が存在していたのである。このあたりは、日本の「八百万の神」の觀念に比すべき重要なポイントであるといえる。

小文では、「グリム」とは何か、「メルヘン」、「童話」あるいは「メルヒエン」とは何か、そして「森」という空間のあり方について、アンケート結果を紹介しつつ考察してきた。授業を受講する際、あるいはレポートを作成する際の参考になれば幸いである。